

# 民族主義、国際主義、世界主義の考察

神 川 彦 松

目	次
一 問題の提起	六 理念型の国際主義
二 近代民族と近代民族主義	七 理念型国際主義は国際法上又は国際政治上のイデオロギー
三 理念型の民族主義	八 実証型の国際主義
四 実証型の民族主義	九 理念型世界一家主義
五 近代帝国主義は民族主義の弁証法的発展	一〇 結び—民族主義、国際主義、世界主義の必然関連

## 一 問題の提起

この論文は、これまで、まだ国際政治学上、さほど取扱われていない民族主義、国際主義および世界主義の三者につき、その概念規定ないし概念構成を試み、この三者の間の関係ないし関連を解明しようとするものである。

まず最初にことわっておかなければならない点は、なべての国際政治学上の概念と同様に、この三つの名辞も、少くとも二つの明確に区別せらるべき概念をもつということである。いわば国際政治科学上の概念と、国際政治哲学な

いし国際政治政策論上の概念これである。筆者は、前者を「実証型の概念」*Begriff im Realtypus*とよび、後者を「理念型の概念」*Bigtiff im Idealtypus*とよぶことにしている。この区別は学問上においては、明確に区別さるべきもので、これを混同すれば、国際政治学上、いくたの混乱や謬論を生ずるのである。とくに、いまテーマとしてとり上げている民族主義、国際主義、世界主義のような従来、いくたの分野で、いろいろの意義に用いられている名辞においては、こういう概念の区別を明確にすることが一層肝要である。これらのことばのように、政治の実践上、宣伝のためのイデオロギーの用語として使用されるを常とするものにおいてはなおさらである。ここでは厳に国際政治学における学問的用語としての三者について考察するものであること、いうまでもないから、まずもってこの二種の内容の区別の肝要なことを注意するのである。

このように、この三者の内容には、実証型の概念と、理念型の概念との二つがあるが、理念型の方は、学問上は、国際政治哲学ないし国際政治政策論の分野に属し、実証型の方は、国際政治科学の分野に属する題目である。ここにいうところの学問の分類についてはその詳細は、筆者の他の著作に譲るの外ないのであるが、<sup>①</sup>要するに、理念型の概念というのは、国際政治上のいろいろの理念を指定し、これを実現化という観点から到達すべき政策目標と立て、この目標を達成するための正しい手段・方法・技術を構想しようとする学的労作上の概念にほかならない。これに対して実証型の概念というのは、世界国際政治史ないし各国、各地域の国際政治史におけるいろいろの歴史的事実につき、普遍化のないし理論化的操作を行うことによって、それらの具体的・実証的概念を構成しようとする学的労作によるものにほかならぬのである。

したがって理念型の概念についてはいろいろの理念について古くからの政治思想史的発展があり、その学的取扱いにおいて、まず、政治思想史的労作を要することはいうまでもない。しかし、国際政治思想史の研究は、まだ全世界的にみても、はなはだ幼稚であり、まとまった著作もきわめて乏しい現状である。この論文では、こういう方向の論議に深入りすることはできない。この論文のテーマについて、筆者は、ただ三つの名辞にふくまるる理念につき筆者の至当と信ずるところを述べるに止まるのである。また実証的概念の構成においては世界国際政治史ないし各国、各地域の国際政治史におけるいくたの国際政治事実の歴史学的研究が前提されねばならないことはいうまでもない。しかし、これらの各種の国際政治史の歴史学的研究は、全世界的にみても、まだはなはだ未発達の状態にあることを免れないからこの論文においても、こういう歴史学的研究の方面に深くわけ入ることを避け、筆者自身の歴史学的研究を前提とするほかはないのである。<sup>②</sup>ただし、世界主義（世界一家主義）の国際政治にいたっては、これは、今日なお、単に理念の段階に止まっており、まだ実現化を距るきわめて遠いものであるから、その実証型概念を構成しえないのはいうまでもない。

つぎに民族主義、国際主義、世界主義の三者は、従来、多くは別々のテーマとして捉えられ、その間における関係、関連ないし統一についての考察に欠けていた憾みあるに顧み、この論文では、とくにこの三者に通ずる基礎は何か、この三者間の論理的または現象論的ないし発展論的関連ないし統一性、総合性を追求することを心掛けた。この三者は、何ら関連なき別個の観念ではなく、その間に密接不離の関係あることを論証しようと試みたのである。

注

- ① 筆者の学問方法論については、「國際政治学概論」第一篇國際政治学方法序論（神川全集第一卷所載）参照。  
なお、筆者の学問方法論の概説については、「学問方法論について」を参照（国士館大学創立五十年記念論文集所載）。  
② 筆者の國際政治史的著作については、神川全集、第二卷、第三卷、第四卷にまとめられている。なお未刊第八卷に世界國際政治史および日本國際政治史に関する学的論文を収録する予定である。

## 二 近代民族と近代民族主義

まず最初に民族主義の考察から出発しよう。

民族主義という観念は、不思議にも、その思想史的発展の順序からみると、國際主義や、世界主義よりも遙かにおくれたものである。その理念型たると、実証型たるとを問わず、民族主義の観念は、近代民族共同体の出現および認識と密接に関連している。しかも、民族共同体 *Nationalitätsgemeinschaft* という歴史的事実の出現は、これを近代民族共同体に限定してみれば、近代の源頭に溯るものであるから近代以前に溯ることはできない。のみならず、その民族共同体の科学的認識や、民族主義 *Nationalitätsprinzip*, *Principle of Nationalities*, *Principe des Nationalités*; *Nationalismus*, *Nationalism*, *Nationalisme* の学問的解明は、十九世紀の半ば以前に溯ることはできないのである。民族主義の理念的解明が、実証的事象の歴史的出現より、遙かにおくれたことは、学問上、奇異の感なきをえないのである。

このような奇異の事態を生じた所以を考えてみるに、思うに、民族主義の観念は、古くは国家主義 *Etatismus*, *Etatisme* の観念に包含されて区別されなかったからであろう。国家と民族とが概念的に区別されるようになったの

は、やっと十九世紀の中ごろであつたから、それまでは、国家主義と民族主義との間に概念上の分化をみなかつたのは当然であつたのだ。十九世紀の中頃、イタリア民族が民族的の自由、独立、統一 *Libertà, Indipendenza, Unità di nazione* を主張し、これを理論化しようとするにいたり、始めて学問的に近代民族共同体の存在が認識されるようになったのだ。したがってそれまでは、国家主義の主張と、民族主義の主張との間に区別が認められなかつたことは自然であつたのである。近代民族主義とは正確にいえば、近代民族国家主義の意味であるから、民族主義が、国家主義の一種であり、思想史上で、国家主義が民族主義の前身であることはむしろ当然の事理であるといわねばならない。

### 三 理念型の民族主義

論述の順序として、理念型の解説から始めるならば、理念型における民族主義というのは、一つの近代民族共同体は、自らが主体となつて一つの自由・独立にして統一ある近代国家組織体を形成すべきであるとする国際政治政策論上の原理であると考ええる。近代民族主義も、これを広義に解するならば、拙著「国際政治学概論」<sup>①</sup>で述べているように、(一)国家形成の原理としての民族主義、(二)国家統一の原理としての民族主義、および(三)国家拡張の原理としての民族主義、の三者があるわけであるが、民族主義という名辞は普通、狭義では、(一)の意味に解せられるから、ここでもこれを狭義に解することにする。

理念型における民族主義は、筆者の解するところでは、社会的ないし団体的個人主義 *Sozialer od. Kollektiver Individualismus, Social or Group Individualism, Individualisme social or collectif* の原理に根拠する。ここに社会的ない

し団体的個人主義とは、國際政治哲学上における個人主義であつて、要するに、一つの社会ないし団体に個性を認め、その独特の性格、特徴、価値ないし權利を強調し、主張する主義をいうのである。この個人主義には絶対的個人主義（または量的個人主義）と、相對的個人主義（または質的個人主義）の二種あるが、民族主義の根柢たる社会的ないし団体的個人主義は、絶対的個人主義に相当するのである。

理念型における民族主義は、したがつてまず、「民族」という個体に「個性」 Individualität, Individuality, Individualité を認めるところから出發する。民族という共同体はその事實的、社会的構成のいかんに関係なく、必然に觀念上、個性を有する個体であるとする。民族的個性はただその民族を構成する各個人の個性とはまったく独立せる別個の存在を有するばかりでなく、他の民族に対し、まったく異なる別個の独特な存在を有し、判然と區別されと思惟される。このようにそれぞれの民族は、それぞれ別異な独特な個性をもっているから、多数の民族はそれぞれ互に他と異なるという自意識をもち、その個別的独立的存在を主張するにいたるのである。それぞれの民族は、それぞれ各別の個性をもっているから、当然それぞれの独立的存在の理由をもつのである。したがつて一つの民族にとってその個性は、必要欠くべからざる要素であつて、その生命であるのだ。個性なきところに民族はないわけだ。

このように一つの民族は一つの個性をもつ個我であると觀念されるから、また当然、一つの人格 Persönlichkeit, Personality, Personnalité をもつものと思惟される。民族はすなわち人格者 Person, Person, Personne である。民族は人格者であるから、当然、自我意識 Selbstbewusstsein, Selfconsciousness, Conscience de soi-même を有する。これはその民族の生存期間を通じて存続するところの自己同一の認識である。この自己同一の認識の存続するかぎり、その民族

の同一性は維持され、その生命は保持される。だが、民族の意識は、ただ自己同一の認識にとどまるものではなく、また一つの自己感情 *Selfst-gefühl*, *Self-feeling*, *Sentiment égotiste* である。民族は自己の個性につき誇りを感じ、他より優越していると自負するのである。民族の意識は、さらに自己認識、自己感情たるにとどまらない、また自己意思 *Selbst-wille*, *Self-will*, *Volonté de moi* をもつものである。民族的人格は自由の意思であって、自己の目的、自己の行動を自ら決定し、断じて他者の意思に服従するを欲せない。民族はまず自己の自由、独立、自治、自律を欲し、他民族その他の団体に従属することを欲せないのである。

民族は人格者であるから、自己の人格に目的価値 *Zweckwert* を認める。民族はそれ自身が目的 *Selbstzweck* であって他者の目的によって律せられることを拒否する。民族は自己目的で、他者に対して手段価値 *Mittelwert* たることを否定する。民族にとっては、自己人格の実現自体が目的であって、他者の目的のために奉仕することを肯ぜない。すなわち民族主義は、自己民族の個性と人格の存在および発展を主張し、自己人格の目的と価値を実現することを要求するものにほかならない。

民族は人格者であるから当然、自己の自由、独立、統一を維持する権利を有する。民族は自己の個性を保持し、その生命および利益を他者に対して主張する権利を有するとされる。民族は自己の動機、行動を自ら決定し、自ら実行する自由と権能をもつと主張する。したがって、もし自己民族の自由と独立と統一とを害する者があれば、民族は自己の神聖な権利の護持のために抵抗する当然の権利をもつと主張されるのである。この抵抗の権利は正義にもとづくものであるから、この権利を遂行するために戦争に訴えることも許容される。この戦争は正しい戦争であり、合法的

な戦争であると主張されるのである。

#### 四 実証型の民族主義

つぎに実証型における民族主義の解説に移ろう。

実証型において近代民族主義というのは、一つの民族があれば、それが主体となつて一つの自由、独立、統一の国家を建設、維持、発展させようとする国際政治科学上の政策ないし行動をいうのである。そしてここに民族というのは、要約すれば、一定の多数の人間が、その住地、種族のような自然的要素、並に、言語、宗教、政治法律、経済財政、風俗習慣、歴史伝統のような文化的要素を共通にすることによって相集まつて共同生活をなし、かつその各成員がその結合紐帯とくに政治的結合につき自覚をもつところの共同体を指すのである。これは自然的歴史的にいわばおのずから生長し発達してきたもので、一種の社会有機体 *Sozialer Organismus*, *Social Organism*, *Organisme Social* とみることのできるものである。このような一つの民族共同体があると、それは、自らが主体となつて、自己の自由、独立、統一ある国家組織体を造ろうとする本能的意欲をもち、これを実現するまで、断じて停止しようとしぬ政策ないし行動がすなわち、民族主義にほかならないのである。

理念型における民族主義が単なる理念的存在たるにとどまり、現実の歴史世界には存在しえないユートピアたるに反して、実証型における民族主義は、実証的、歴史的世界に具体的に実在した存在である。前者はゾルレンの世界の存在であるに對して、後者はザインの世界の存在である。世界国際政治史上の近代は、史家によって「民族主義の時

代」とよばれるように、この時代は多くの民族が、他国の支配を脱して、つぎつぎに自由、独立を獲得し、統一を遂げた時代であるということができるのである。

民族主義は上に述べたように、一つの民族が主体となって、一つの自由、独立、統一の近代国家を形成する政策ないし行動である。ところが、この民族主義は、歴史上の現象形態として、三つの方式をとって発現するをみるのである。

第一は、各民族・一国家の方式 One Nation—One State である。これはそれぞれの民族がそれぞれ別個の一国家を形成する場合である。これが民族主義のもっとも普通の場合であって歴史的に「民族の解放」とよばれる。それぞれの民族は、それぞれ従前の支配民族ないし支配国家の支配から自己を解放する闘争を行い結局、その自由、独立を獲得するにいたるを常とするからだ。かような場合、民族は「自決権」 Right of Self-determination, Selbst-bestimmungsrecht を有するといいい、こういう原則を「民族自決の原則」とよぶのである。

このようにして、それぞれの民族はそれぞれ別個の国家を形成しようとして努力するのであり、その結果として出現した国家を「近代民族国家」 Modern Nation-State, Moderner Nationalstaat, État national moderne とよぶのである。しかし、現実の歴史世界では、厳密に一つの民族が一つの国家を形成するときにはきわめて稀にしか起らぬ現象である。多くの場合は、一つの主たる民族 Hauptnation が民族国家を形成するが、なお、その版図内に若干の従たる民族 Nebenation を包含するのである。こういう従たる異民族の問題を「少数民族問題」 Minorities Problem, Minoritäts-probleme とよぶのである。

第二に、一民族全体・一国家の方式 *Whole Nation—One State* である。これは一つの民族はその民族全体をもって一つの民族を形成する場合である。したがってこの場合には、その民族共同体の境界と、その民族国家の国境とは全く合致するは当然である。こういう場合その国境を「民族国境」というのである。しかし現実の歴史においては、種々の事情により一つの民族の全体が、その民族国家の版図内に包含される場合は、むしろ例外である。多くの場合は、その民族の大部分をもってその民族国家を形成し、その片割れはなお他国の版図内に残留するを免れないのである。このようにして残留した民族は、その支配国家内で少数民族となるのである。このような場合に、その民族の本国たる国家は、必然にその自己民族の片割れを回収しようとする運動をおこす。これを「イルレデンティズム」*Irredentismus, Irredentismo* と称するのである。

民族主義の第三の方式は、その民族のみ・一国家 *One Nation only—One State* の方式である。これは一つの民族は、その民族に属する者のみをもって、その民族国家を形成すべく、その版図内にある異民族を排除すべきであるという原則である。しかし、この方式は現実の歴史では全く実際に行われなかったものである。ただ、第一次大戦後、ギリシヤ・トルコ戦争の終結にあたり、この両国は自国版図内にある相手国の民族を相互に強制的に移送させたのを最初とする。第二次大戦では、ソ連は、この原則を占領領土に適用し、ドイツで占領した東プロシヤの地よりドイツ人を駆逐し、日本で占領したハボマイ・シコタン、千島、樺太の地から日本人をことごとく駆逐したときその著例である。

以上、簡単に、理念型における民族主義と、実証型における民族主義との概念規定を試みた。ついでこの両種の民

族主義の国際政治史上の効用を観察してみよう。

国際政治史をひもとけば、誰にも明らかなように、理念型の民族主義は、民族の“自由”“独立”ないし“統一”の標語に代表されて、後進民族の「自由解放」*Befreiung, Libération, Liberation* 運動のイデオロギーとして常に使用されたのである。民族主義の学問的解明は、ようやく十九世紀の中頃から起ったものであること、前に触れたとおりであるが、後進民族の支配民族に対する自由解放の実際運動は、西ヨーロッパで、夙に近代初頭から起っていたから、実際において、自由解放の標語は、近代の始期から使用されていたとみて過言ではない。このような後進民族のいわば自然本能的な叫びから、歴史の経過のうちに、理念型の民族主義が構成されるようになったのである。

これに対して、実証型の民族主義の方は、近代国際政治史上、後進民族の自由解放の運動が、つぎつぎに成功するにいたった十九世紀の半ばになって、この国際政治史上の史実を省察して、学者によって理論的に構成されるようになったものである。フランス大革命の政治的標語であった *Liberté, Égalité, Fraternité* は、個人の天賦人權の主張として使用されたが、まだ民族には適用されなかった。人間の天賦の基本権の主体は、各個の個人であると考えられたが、いまだ各個の民族共同体にまで推しおよぼされなかった。この個人の天賦人權の原理が、進んで各個の民族という社会的ないし団体的個人にまで推しおよぼされるようになったのは、一八三〇年ころから台頭してきたイタリアや民族の自由解放運動の時機からであると考えて誤りはなからう。この実証型の民族主義は、このようにすでに国際政治史上、実際に起った民族主義的事象を対象として観察した結果、生れてきたものである。したがって理念型の民族主義の場合のように、論理的、精密的、徹底的たるをえないのは自然であらねばならない。理念型の民族主義は嚴格に

「一民族、一国家」の方式を掲げるけれども、実証型の民族主義になると、中途半端なものとならざるをえないのである。

## 五 近代帝國主義は民族主義の弁証法的發展

つぎに問題となるのは、民族主義と帝國主義 Imperialismus, Imperialism, Imperialisme との関係である。

近代帝國主義は近代民族主義の必然の發展であつて、両者は密接不可分の関係をもつものである。いかなる後進民族も、一たびその自由解放の運動に成功して、近代民族國家を建設すると、必ずや進んで、帝國主義的發展を試みるにいたるのである。帝國主義は民族主義の弁証法的發展にほかならないのだ。

上に説いたように、理念型の民族主義は、絶對的な社会個人主義の原理に根拠するもので、いわば民族という共同体の個人至上主義にほかならない。それはシュティルナーやニーチェが個人について説いたような徹底的個人主義が、民族の場合に発現したものとみて、誤りではないのである。

したがって、理念的民族主義が、發展すれば、一つの民族が、自己の對外的發展のために他民族を犠牲として武力的に征服を試みるところの主義主張となることは当然である。そのきわまるところは、一つの民族が、その絶大な武力を發揮して、他のあらゆる民族を征服して、一つの普遍的世界帝國を建設しようとする普遍的帝國主義となることは当然であらねばならない。理念型の民族主義は古代ローマのような普遍的・世界的帝國主義に到達することは論理上、当然であるわけだ。

ところが実証型の民族主義は、實際上可能なかぎりで一民族・一国家の原則を實現しようとするものであり、その成果たる民族国家を基盤として、その上に可能なかぎりの世界帝国を建設しようとする政策・行動となるのである。したがって、近代国際政治史上における帝国主義は實際上、それぞれの近代民族国家が主体となって、世界における相対的、優越的支配地位すなわち帝国を建設しようとする政策・行動となったのである。いわば近代帝国主義は相対的帝国主義たるに終り、絶対的・普遍的帝国主義とはならなかったのだ。これ普通に、古代帝国主義と近代帝国主義との差異点であると指摘される所以である。<sup>②</sup>

注

① 民族主義の三つの方面については、政治的原理としての民族主義参照（全集第一巻、所収、国際政治学概論、第二篇第四章第二節）。

② 民族主義と帝国主義に就ては、全集、第一巻所収「国際政治学概論」、民族主義、帝国主義に関する部分並に全集第七巻（未刊）所収、民族主義帝国主義に関する諸論文を参照せよ。

## 六 理念型の国際主義

つぎに第二の題目たる国際主義について述べよう。国際主義の概念にも、理念型の国際主義と、実証型の国際主義の二様あることは民族主義の場合と同然である。

まず理念型の国際主義 *Internationalismus im Idealtypus* の観念は哲学上の社会連帯主義に根拠するものである。これは理念型における民族主義の観念が、哲学上の社会個人主義に根拠するのと対照するのである。

社会連帯主義 *Sozialsolidarismus, Social Solidarity, Solidarisme Social* という言葉は思想史上では、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて自由主義に対する反動として、主としてフランスで使われ出したものであることは人の知るところ

るである。社会連帯とか、社会連帯主義という名辭が何を意味するかは、フランスの学界でも諸説紛々であつて定説のなかったこと、また人の知るとおりである。この論文では、フランスその他、諸国におけるもろもろの学説を検討することはできないから、直ちに筆者の是と思惟するところを述べることにする。<sup>①</sup>

ここに社会連帯主義というのは、一つの社会ないし団体を構成する各員は、すべて共同の目標をもっており、これを達成するために共同利害、自由意思、および平等權に準拠して、相協働すべきであるという主義原則にほかならぬのである。すなわちこの主義は、共同社会理念 *Gemeinschaftsidee* を前提するのである。

人も知るようにフランスの学界ではエント以来の伝統に基いて、社会連帯を解明するにあたつても、その根拠として、自然科学的ないし社会科学的な事実または法則を提立しようとするのである。しかし、社会連帯主義は理念型の觀念であるから、これを自然科学上または社会科学上の事実ないし法則に依拠させることは方法論的に正当ではないと思われる。この点では、フランツ・シュタウディンガーなどドイツの新カント学派の所論が正しいと思われるのである。<sup>②</sup> 社会連帯主義は「共同社会理念」という一つ理念像に依拠すべきものと考えるのである。<sup>③</sup>

共同社会の各員は互いに他を目的価値として承認し、自由な人格者として尊重すべきものである。そして各員は共同社会の存立および発展のための共同の目標のために協動するものである。

共同社会の各員は、その根本目標への努力において共同利害 *Gemeininteresse*, *Common Interest*, *Intérêt Commun* をもつ。根本目標についての利害がすべての成員にとり共同であり、同等であることが、共同社会の一つの根本条件であらねばならない。もし根本目標についての利害が、すべての成員にとって共同でもなく、同等でもなければ、共

同社会のうちに支配・服従の差別を生じ、共同社会たる性格を喪失して、対立社会ないし利益社会に墮するのである。目標についての共同にして同等の利害がなければ、目標への協働の自発性 *Spontaneität* が起りえないのである。各員は目標の達成において共同にして同等の利害をもつから、各自は自己の利害から進んで自由意思をもって自発的にその目標達成のために相協働するようになるのである。

共同社会の各員は、それぞれ自由な人格者として自由に協働するものであるから、各自は平等な地位をもつことは当然である。各員が平等であることは共同社会の本質的な要件である。平等の地位と権利がなければ、共同社会は墮落して対立社会ないし権力社会が現われる。平等であることは、しかし、必ずしも各員が現実 to 同等の権利や権能をもつことを意味しない。共同社会の機能を分担するにあたっては、各員の能力、特性、地位に応じて労働分配の行われることは当然である。ただ各員は、社会全体の根本政策の一般的処理につき平等の立場で参与する権利をもつべく、各員間に差別待遇をすることを排斥するに止まる。自由な人格者の協働からくる、自由と平等とは共同社会の二大条件である。

理念型における国際主義は、右のような社会連帯主義の原理に根拠するものである。すなわち、理念型の国際主義とは、世界的共同社会 *Weltgemeinschaft* に存する民族国家と民族国家との間には社会連帯の理法が支配しており、この連帯関係を向上発展すべきが近代国際政治の任務であるとする主義主張にほかならぬのである。

それぞれの個人は共同社会生活においてでなければ、その知性、道德、身体を完全に発展せしめ、人間としての完全な生存を実現させることができないと同様に、またそれぞれの民族的ないし国家的共同体も、世界共同体生活にま

つのでなければ、民族的ないし国家的共同体としての社会的、文化的、道徳的ないし経済的、政治的生活の完全な発展を期することのできないのは当然である。一つの民族ないし国家は他の民族ないし国家との間に世界的連合を建設し、いろいろの交通を行い、相依り相助けて、始めてそれぞれの生存を保持し、発展させうるものである。世界的國際的連合の建設・維持・発展に相まつて始めて個々の民族ないし国家は、十分にそれぞれの生存と発展とを勝ち得るものといわねばならない。

理念型の國際主義は、ある民族ないし国家と他の民族ないし国家との間に、ただ共同利害の存在することを承認するのみでは十分でない。他の民族ないし国家の存在が、ただ自己主族ないし国家の生存と発展に役立つがゆえにのみ、他の民族ないし国家の存在を認めようとする場合には、それは自己の生存と発展のためにのみ、他の民族ないし国家を手段視するもので、それ以上には出ない。國際主義は他の民族ないし国家をたんに自己目的のための手段としてのみ認めるものではありえない。そのような場合は、社会個人主義の立場に立つものであつて、社会連帯主義の立場に立つものではないのだ。社会連帯主義の立場は、他の民族ないし国家が、自国のために役立つと否とに論なく、他者の人格を尊重し、承認するものである。自己の人格を目的価値として認めると同様に、また他者の人格をもたんなる手段価値ではなく、一つの目的価値として尊重し、承認するものである。自国が国家として個性を有し、人格を享有し、目的価値をもっており、他国の手段としてのみ認められることを拒否するように、また他国に対しても、他国が自らの個性をもち、人格を享有し、目的価値をもつものであることを承認するものである。あだかも個人について「汝自身において、また他人において、人間性を常に同時に目的として取扱い、たんに手段としてのみ取扱わない

ように行動せよ」という実践理性の命令が有効であるように、国家においてもまた同様であるべきである。すなわち「自国において、また他国において、共同社会性 *Gemeinschaftlichkeit* を常に同時に目的として取扱い、たんに手段としてのみ取扱はないように行動せよ」という国際的实践理性の命令に服せねばならない。世界的国際社会の各成員は相互の関係において、同時に目的たるとともに、また手段でもあるとして取扱われなければならない。すなわち、理念型の国際主義は、このかぎりにおいて、相対的社会的人主義の上に立つところの、理念型の民族主義と同一に帰することになるのである。

ところが理念型の国際主義は、世界国際社会に存する各個の民族ないし国家が相互的に各自を、同時に目的ならびに手段として取扱うべきであるという原則に止まることをえない。それは、さらに進んで、各個の民族ないし国家の利害は、同時に世界国際社会全体の利害 *Gesamtinteresse* であり、世界国際社会の利害は同時に個々の民族ないし国家の利害であるべきであるという原則まで向上しなければならないのである。個人の利益は同時に社会の利益であり、社会の利益は同時に個人の利益であるとする社会連帯の理法を認める以上は、当然、個々の民族ないし国家の利害は、世界国際社会全体の利害であり、また世界国際社会全体の利害は同時に各民族ないし国家の利害であるべきことを承認せねばならないのである。

## 七 理念型国際主義は国際法上又は国際政治上のイデオロギー

理念型国際政治は、歴史上では、ヨーロッパ国際団体 *Europäische Völkergemeinschaft* の法規範たるべき、ヨーロ

ッパ公法すなわち国際公法の分野でイデオロギーとして使用されたのである。人も知るようにいわゆる「国際法の父」The Father of the Law of Nations とよばれるフリーゴ・グロチウス Hugo Grotius のかた国際法の分野ではいわゆる自然法主義の学派が優勢であった。その影響の下に、今日においてさえ、なお国際法の領域では実証主義学派よりも、自然法主義の学派の方が優勢であるという実情にある。したがって、近代の国際法史を通じ、また国際政治史を通じて、どんなに自然法主義の国際法思想が有力であったかがわかるのである。理念型国際主義の思想は、本来、こういう国際法の一思想として発展し来ったものなのである。

近代の国際政治史上、いわゆる「ヨーロッパ公法」Droit Public de l'Europe, Public Law of Europe とか、「国際公法」Droit des Gens, Law of Nations とかいうものは、真実に、近代国際政治の法規として実行されたというよりは、むしろ、国際団体内の諸国、ことに大国が、自国の対外政策を正当化するために巧妙に利用し、悪用し濫用したイデオロギーであったということは、近代国際政治史の史実の明瞭に実証するところである。近代において、国際政治の実体と、国際法のいわゆる法規とか、イデオロギーとかの間には実に雲泥の差があったことは、これまた歴史の実証するところであるのだ。

このように、理念型の国際主義思想は、本来、国際法上のイデオロギーとして起りきたったものであるが、このイデオロギーはしたがって、近代国際政治史上において、実際には諸国の外交上の行動のイデオロギーとしてさかんに使用され、悪用されたのである。いわゆる「平和主義」Pazifsmus, Pacifism, Pacifisme, とこのいわゆる「国際連帯主義」Internationaler Solidarismus, International Solidarium, Solidarisme International の二つほど、近代国際政治史上、

濫用され、悪用されたものはないのだ。国際外交上、いかなる国家も、自国の国家的利益 National interest, National-interest, Intérêt national を伸張するために、まず、国際的平和、ないし、国際共同利害、国際相互依存、を強調したことは近代外交史のもっとも明瞭に物語るところであるのだ。

右にのべたように、理念型国際主義は、歴史上では、もっぱら、国際法上ないし国際政治上のイデオロギーとして使用されたもので、決して、国際法上または国際政治上、実行されたものではないのである。これは所詮、イデオロギーとしてのみ存在したもので、純粹なるイデオロギーたるにすぎなかったのである。こういうイデー、ないしイデオロギーは、実際の国際外交上ではもっとも、現実であるかのように説かれ、また主張されるので、實際上、魔術的効果を發揮し、識者ないし大衆を重大な錯誤に陥らしめ、現実国際政治の進歩にはむしろ大なる害悪を与えたものである。元来、政治はことばの魔術すなわち宣伝を通じて行われるものであるが、とりわけ、国際政治においてはイデオロギーの魔術が横行し、素人を瞞着するのだ。理念的平和主義と、理念的国際主義とは、そのもっとも顕著なものであるにすぎない。この二つのイデオロギーは近代国際政治の進歩に貢献したといよりは、むしろこれを害したものであるとみねばならない。近代史上で、いわゆる国際法なるものが、やかましく、もてはやされ、事毎に援用されるに反して、国際政治学なるものは全く発生せず、存在しなかったという実に奇態な現象は、何に原因するかと考うるに、その一つの原因は、近代国際政治現象は、つねに、自然法的ないし理念主義的に解説されるを例とし、ほとんどまったく、これを実定法的ないし実証主義的に把握されなかったという点にあるとみねばならない。近代国際法はたんなる理念法ないし、正法たるにとどまり、現実の国際政治とマッチする国際実定法ではなかったのだ。<sup>④</sup>

## 八 実証型の國際主義

近代國際政治史は大観すれば民族主義と帝國主義との時代であつて、國際主義の時代ではなかった。國際政治思想の上では、前述のように、理念型國際主義が盛んに行われたけれども、それは、たんなる法律上ないし政治上のイデオロギーとしてであつて、決して実証的なものではなかつたのである。

しかし、近代において、國際思想として國際主義が盛んに行われた結果として、きわめて除々としてではあるが、國際間において、國際主義的運動や秩序も起り始めたのは事実であつた。ウィнна會議後、十年ばかり、ヨーロッパで行われた「神聖同盟」「欧州協調」「會議外交」などの試みは、たしかに國際主義的な傾向をもつものであつたのだ。しかし國際主義はなお、思想的ないしイデオロギー的な存在たるにとどまり、現実的なものではなかつたのだ。

近代國際政治史上、真に、始めて、現実的な國際主義的運動や企画が起つたのは、第一次世界戦争を動機とするものであつた。この名実ともに全世界的な大戰の勃発および蔓延が全世界の人々を驚愕させ、眞実、國際主義的な思想感情を喚起させ、國際政治の分野で、國際主義的秩序の設定を試ましめるにいたつたのである。國際連盟創立の運動並に企図がすなわちそれなのである、近代國際政治史上では、國際連盟と、その發展たる國際連合が、現実國際主義の現実型態なのである。

そこで、まず実証型における國際主義とは何かといえ、國際平和の確立と、人類文化の向上と、各國家・民族の自由、獨立の保障とを目標として、法的永続的機構によって行動する世界的政治団体の政策、行動であるということ

ができれば。

実証型国際主義は、前述したように、国際連盟と国際連合とに具現されている。国際連盟 *League of Nations*, *Société des Nations*, *Völkerbund* は、法律的には国際連盟規約 *Covenant of the League of Nations*, *Pacte de la Société des Nations*, *Völkerbundsatzung* によって規定されている。また国際連合は法律的には国際連合憲章 *Charter of the United Nations*, *Charte des Nations Unies*, *УСФАВ организации объединенных наций* によって規定されることはいふまでもない。

しかし、国際連盟の成立して活動を開始した第一次大戦直後の一九二〇年から、第二次大戦が勃発した一九三九年の間における世界政治の経過と、国際連盟の活動の歴史とを歴史的に研究するならば、何人も、国際連盟規約なるものは、ただ実際には、世界的集団安全保障機構の一つの模型であり、法律的擬制たるにとどまって、現実には機能し、実証的に妥当したものでなかったことが明瞭なのである。アメリカ合衆国の憲法を模範として、プロッフェッサー大統領・ウッドロー・ウィルソンが、自己のプリンシプルの上に構築した国際連盟という建造物は、たんなるロボットたるにとどまり、決して有効に機能しえなかったのだ。いなそれにとどまらない。国際連盟というロボットが存在したために、当時の世人や政治家が錯覚に陥り、これの効用を過信し、事実の認識を誤まりて重大な国際事件の処理を無雑作にこの機構に付託し、またはこの機構を利用ないし濫用しようとしたがために、実際には、国際情勢を一層悪化し、紛争を錯綜せしめ、かえって遂に国際の平和と秩序を破壊し、大戦争を招来する重大原因をつくるにいたつたのである。一九三一年の満州事変の勃発から、一九三九年の第二次大戦の勃発にいたる十年間の世界外交史は、

このことを実証して余りありというべきである。

かくて一九三九年に起った第二次大戦の結果、一九四五年四月、ルーズヴェルト・アメリカ大統領の主導下に開催された連合国のサンフランシスコ会議で、六月、國際連合憲章は採択されたのである。國際政治史的にみれば國際連合は、たしかに國際連盟の後身であり、その発展たるにすぎない。これは明かに國際連盟規約の第二版であり、その改正版たるにほかならぬのである。

國際連盟なるものは、その実際はたんなる「討論の機関」たり、「宣伝の舞台」たるにとどまつたるに対し、國際連合なるものは、憲章の文句の上では、國際政治上のある程度の執行機関であり、制裁機構であるようになっていのである。しかし國際連合が成立し、活動を開始した一九四五年十月から今日にいたる約二十五年間の世界外交史を実証的に検討するならば、國際連合も、實際の世界的集團安全保障機関としてはほとんどまったく機能しえない、きわめて幼稚不完全なものであることが明瞭なのである。

右にのべたように、國際連盟と國際連合に歴史的に具現された実証的國際主義は、なおはなはだ幼稚であり、不完全なもので、その進歩發達は、なお前途遼遠であるといわねばならない。世界的・普遍的集團安全保障機構たる世界連合が發達して、その十分の機能を發揮するにいたるためには、今後なお数世紀ないし数千年を経過せねばならぬと学問的に予見されるのである。壮嚴な大伽藍は決して一日では成らぬのである。

注

① 拙稿「レオン・ブルジョア社会連帶論の先駆者について」(吉野作造博士記念論文集)。

② Franz Staudinger, Wirtschaftliche Grundlagen der Moral; Kulturgrundlagen der Politik 参照。

- ③ 社会連帯主義、世界連帯主義の解説に關しては、神川全集第一卷、國際政治學概論、國際連盟政策論の当該部分、第七卷（未刊）所収、論文参照。
- ④ 國際法規範が實証的に妥当すべき現実的基盤たる國際政治社會の實體と國際法との関連を研究した著述はまだない。

## 九 理念型世界一家主義

以上述べた民族主義と國際主義は、ともに世界史上近代に属するものであり、近代以前にはなかったものということができる。またこの二者にはともに、理念型のものと、実証型のものと、二つの範型があるのである。ところが、これに反して世界主義（世界一家主義）にいたっては、古代から夙に存在しており、世界史の各変革期に周期的に發現した思想であり、決して近代の特産ではない。またこれは、その歴史の悠遠なのに反し、今日といえども、なおたんに理念型のものたるにとどまり、決して実証型の段階には達しないものである。

世界主義 *Kosmopolitismus*, *Cosmopolitanism*, *Cosmopolitisme* は、一言もていえば、コスモスすなわち世界を一つの家となし、その上に住む全人類をその家族とみる共同体思想である。こういうゲマインシャフト的思想は、本来、人間に固有する本然的なものであるから、場所の東西を問わず、時の古今を論せず、存在することは当然である。古代シナにおける「大同」の思想や、わが国における「八紘一宇」の觀念のごとき、もとより、この種の思想に属するのである。印度や東方世界においても、もとよりこの種の思想の存在を跡付けうることはない。しかし中国、日本を始めこれら諸国のこの方面の思想史、哲学史の研究はまだ幼稚であって、文献の徴すべきものも少ないようだ。思想史や哲学史の研究のとくに發達していると思われる西洋にみるならば、ギリシャ時代より今日まで実に多く

この種の思想、学派の輩出を見たことは人の知るとおりである。試みにその二三に触れてみよう。

ギリシヤの哲学史上、世界一家主義の元祖はキュニク学派の祖アンティステネス Antisthenes c. 455 B.C.-c. 360 B.C. であるとされる。かれは師ソクラテスの福德合致の教説にしたがい、幸福は徳を基礎とするもので、徳は知識に基づくものであつて教えられうるものである。しかし、世間の普通の快樂なるものは欺瞞的であり、眞の幸福ではない。眞の幸福はこういう世俗の快樂を脱却し、不合理の偏見や習俗にとらわれず、万人にひとしく妥当する徳の法則に従うところにあると説いた。キュニク学派と対立するキレネ学派のアリスティポス Aristippos の教説もともに世界一家主義的である。しかし、この二つの学派の何れにおいても、コスモポリタン（世界公民）という語は、人道に対する忠誠や情熱をあらわすのではなく、むしろ社会文明に対する責務よりの離脱を意味するのである。キュニク派の徒は、文明社会のただ中で、自然状态的な生活をなし野蛮人の生涯を送ろうとするにいたつたのである。この派の主な特色は自分の精神的貧困についてパリサイ人的虚栄をもち、衆人の面前に奇行を誇り、習俗を嘲けるにあった。キュレネ学派の哲学が、エピキュロス学派に復活したと同様に、キュニク学派の教説は、ローマ時代に入り、ストア学派の学説として花咲き、世界一家主義の思想に大なる貢献をなすにいたるのである。

キュプロスのゼノン Zenon 335-263 B.C. を開祖とするストア学派はローマ帝政時代に頂点に達したが、その代表者にはセネカ Seneca 5B.C.-65. エピクテトス Epiktetos c. 55-c. 135. マルクス・アウレリウス Marcus Aurelius Antoninus 121-180. らがある。この派は要するにキュニク学派の倫理説とヘラクレイトス Herakleitos c. 500 B.C. のロギス説を結合したもので、その形而上学は有機的唯物論ないし自然的汎神論である。世界精神 Weltseele. 世界理性 Weltver-

Σίμωが万有に遍在して秩序、目的、調和の原理として作用し、その支配は必然的決定的であると同時に摂理的であるとする。この根本原理に基いて合自然の道德を立てる。人間の自然は世界理性の分身たる人間理性であり、徳はすなわち、この自然に適合すること、理性に従うことである。合理性は合自然であると同時にまた合世界である。合自然の生活は激情 *Pathos* によって理性や靈魂が妨げられない生活であり、すなわち感情鈍麻 *Apathēia* である。これが道德の理想境であるとするのである。

ストア学派の世界一家主義は、この原理に基いて、人はみな世界理性を分有するもので、すべて平等であり、同等の権利をもつ。人類は、世界理性の分有者として、一つの共同体の成員であり、同胞であるとするのである。人間は世界の一市民であるという世界公民主義から、この派はさらに進んで人間は宇宙の組織の一部であるとする天人一体観に到るのである。この思想の宗教的色彩は、この学派の勢力と魔力に寄与したのである。

古代の哲学とは別に、キリスト教の教説が世界一家の最古の源泉を成していることはいうをまたない。人間は父なる神の子であり、みな兄弟であり、神の愛において一体に結ばれるという教えが、世界一家主義の基調を成せることは詳述するを要しないのである。

また近代においてカントの永遠平和論の根底となる世界公民の觀念や、世界公民法の原則が、世界一家一主義と相通ずることもここに詳述するを要しないのである。

そこで、国際政治哲学で理念型の世界一家主義をどう観念すべきかというに、それは社会連帯主義の根本原理に基いて、人類社会でその成員たる個人と個人との間に、連帯關係の存在を承認し、各個人は人類という共同体の一員

で、人道に忠誠であり、人類全体の生存と繁栄と福祉を実現するため、自由、平等の立場で協働すべきであるという主義原則であるということができよう。

同じく社会帯連主義の基礎原理に基くものであっても、理念型の国際主義は前述したように、民族という共同体に主体性を認め、民族と民族との間の社会連帯を確立しようと観念するものであるに対して、世界一家主義は、個々の個人に主体性を認め、個人と個人との間の社会連帯を確立しようと観念するものである。

人類の歴史をみると、人間の忠誠心は政治的に、狭い社会から次第に広い社会へとその範囲を次等に拡大してきたことを知るのである。家族から氏族へ、氏族から部族へ、部族から、民族へと拡大してきた。しかし今日においても、現実には、人間の忠誠は政治的に、なお民族や民族国家の限度にとどまっているといつて誤りではないのである。しかし人間の忠誠がこの範囲にとどまっておる限りは、真に人類間の平和は確立することはできず、人類社会に安全と秩序をもたらすことはできない。何としても、人間は「人類への忠誠」をもたねばならないのだ。

ところが、現実において人間社会も政治的に飛躍するものでないこと自然現象の場合と同様である。そこで人類は、実証型の国際主義から一躍、理念型の世界一家主義へと跳躍するものとみることができない。人類が、実証型の国際主義から、将来、実証型の世界一家主義へと進歩するためには、二つの段階を経過するものとみるべきであるう。

その第一の段階は、世界一家の国際主義であり、第二の段階は、世界一家の普遍主義である。ここに世界一家の国際主義 Cosmopolitan Internationalism, Kosmopolitische Internationalismus というのは、人類が多くの民族国家に分れ、

相連合して、世界連邦 *Weltstaatenbund* ないし世界連邦国 *Weltbundesstaat* を形成する段階における世界一家主義である。今日の国際連合も、見方によっては、きわめて幼稚な世界連邦であるけれども、これは、まだきわめて低い発展段階のもので、これは漸次に高度の段階に向上すべきは当然である。この世界連邦が、一つの世界連邦国まで進化するには、きわめて長い歳月を要するであろうことは自然である。この世界連邦国の実現にいたる間の世界一家主義は、国際社会に妥当するものであつて、個人と個人との間に、純粹に行われるものではないから、これは、世界一家的国際主義というべきである。

しかし、人類社会の発展は、世界連邦国の段階にとどまるべきではなく、その究極においては、人類が民族の垣を撤廃して、真に個人が単位となつて合衆共存する一共同体を形成する時点にいたるべきである。このときこそ、真実に全人類が一つの単一の世界国家 *Weltstaat* を構成するのである。そのときにいたつて人間社会の普遍的政治団体は完成するというべきである。このような究極の場合における世界一家主義は、世界一家的普遍主義 *Cosmopolitan Universalism*, *Kosmopolitische Universalismus* とよぶべきである。人類はこの段階にいたつて、眞実の世界一家主義に到達するものというべきである。

## 一〇 結び—民族主義、国際主義、世界主義の必然関連

以上であらまし、本論文の梗概を終った。要するに、民族主義、国際主義、世界一家主義という三つの観念は、その理念型たると、その実証型たるを問わず、その根本原理は、社会個人主義か、社会連帯主義かであることがわか

る。この点で、この三者の間に、思想上の関連があることを知るのである。

およそ古来のあらゆる政治思想は、大観すると、個人本位の思想か、団体本位の思想かの何れかに属するのである。これは要するに個 *Individuum* と類 *Gattung* との何れを第一次的のものと考えるかより来る区別である。個を第一次的のものとみれば、個人本位主義となり、類を第一次的のものと考えれば、団体本位主義となるのである。したがって、民族主義は、社会個人主義の純粹なものである。國際主義は、社会連帶主義に基くもので、団体本位の思想である。しかし國際主義は前述したように、一面では相對的社会個人主義思想ともみられるもので、要するに、純粹社会的個人本位の思想と、純粹社会連帶の思想との中間的のものとみることができるのである。もし個なるものと、類なるものとの中間に種なるものを認めるとするならば、國際主義は、種なるものに属するということができよう。世界一家主義にいたっては、疑いもなく、団体本位思想の純なるものである。これは、個に対する類に当るものである。ここにおいて、民族主義、國際主義、世界一家主義は個と種と類との關係にあるものとなるのである。この三者は思想上、必然の關係を有するものとみることができから、この点からみて、民族主義、國際主義、世界一家主義の三者間には觀念上、必然の密接な関連のあるものとみることができのるのある。

このようにして民族主義、國際主義、世界主義の間には、理念型においても、また実証型においても、必然な密接關係があるもので、決して個々別々の無機的關係のものでないことを論証しうらと思うのである。